

モードは語る

中野 香織

パリにアトリエを構える鈴木健次郎さんというテーラーがいる。一着100万円を超えるスーツを作る。年5回帰国し、オーダー会を開くたび満数の約40人の顧客が訪れる。新型コロナ下においても状況は変わらない。今年2度目の帰国でオーダー会を開いた鈴木さんを訪ねた。

鈴木さんが作るスーツは量産品とは別次元のもの。パリでの20年にわたる努力の集積が生むスーツは、着る人の周囲の空気を変える。鈴木さんいわく、「宝石のようなスーツを目指している」。

その表現が誇張ではない証は、と

フィッシュマウスの襟



フィッシュマウスは
パリのスーツの象徴

りわけ襟に認められる。フランスのテーラリングの特徴である「フィッシュマウス」である。上襟と下襟の継ぎ目の空間が魚の口のような形をしているのでこのように呼ばれる。最高峰のテーラーとして知られたフ

世界が認めるエレガンス

ランチェスコ・スマルトが120以上のバリエーションを作ったことで、フィッシュマウスはパリのスーツの象徴になった。

なぜこの形なのか？ 「もとは柄合わせのため。チェック柄を崩さないよう下襟の角を直角にする。すると下襟全体に丸みが生まれる。上襟も角を直角にし、柄が途中で消えないよう作り込んでいく。結果としてこの形になる」と鈴木さん。通常のノッチ（切り込み）の上着と比べると違いは明らかで、フィッシュマウスの襟は胸元に優雅な迫力を生む。

「スマルトのクレイジーな技術力

と美意識に裏打ちされたデザインだ。彼は仕立てるのが難しいモデルばかり作る。ほかのテーラーがまねできないように」。難度の高い襟は、黒子に徹すべきテーラーのブランドロゴのようなものだ。スマルトの技術を継承する鈴木さんが目指すレベルは「圧倒的な美」。「お客様が世界中どこでも、エレガントですねと褒められるスーツを作りたい」

スーツ姿には美意識を含めた教養がすべて現れる。美意識は経営における判断力や倫理観にも直結する。だからこそ、多様な人種の人々が入り交じる世界のエリート層は、スーツに手を抜かない。日本国内やIT業界のみを見て「スーツは終わった」というのは、まだ少し早い。

(服飾史家)